
2011 IARU GSP 報告書

この夏私はケンブリッジ大学の IARU Global Summer Program に東大から参加学生として派遣していただいた。普段は研究室に籠りっきりで研究をしている大学院の生活の中で、ケンブリッジでの体験は自分の学業や人生での目標を新たな視点から見つめ直すことができた非常によい経験であったと思う。

海外でのコミュニケーション

自分にとって今回が海外で学生生活を体験する初めての機会となった。日本人全般にとって当てはまることと思うが、海外での生活において最初にぶつかった壁は英語による人とのコミュニケーションの問題である。私は親の教育のおかげで英語に関しては物心ついた頃から勉強し（海外での生活経験こそなかったものの）、またここ数年は自分でも意識して学習していたこともあり、本プログラム参加前においては英語力についてある程度の自信は持っていた。しかし当然のことではあるが実際に参加し海外の学生と交流してみるとこの自信はもろくもくずれさることとなった。今回ケンブリッジの GSP に派遣された学生は全部で 14 人であり、その内訳は、東大 3 人、北京大 1 人、シンガポール大 3 人、オーストラリア国立大 2 人、UC バークリー 2 人、イェール大 1 人、コペンハーゲン大 2 人であった。この 14 人の中でおそらく自分は英語力では下から 3 位以内に入っていたように感じる。特に英会話能力については顕著でプログラムが始まって間もない頃は会話に入れず孤立を感じることもままあった。もちろんシンガポール大を含めネイティブの学生も多かったが、中国人やデンマーク人は自分も含め一緒に渡英した日本人よりよっぽど英語が達者で、日本人の英語力の低さに愕然した。これには日本語と英語の語学・文法としての差異も多少は影響しているだろうが、根本的に英語に対する学習意欲や関心、環境において日本は諸外国と比べ確実に劣っているように感じる。例えばコペンハーゲン大から来た学生の話によると、デンマークでは大学のほとんどの講義・ディスカッションは英語でなされるそうである。これには参考書をわざわざ

ざ母国語に翻訳する際にかかる手間と費用を省くというメリットもあるそうだ。中国については詳しい話は聞いていないが、英語に対する高い関心はおそらく同様であろう。これらの国に対し、日本の英語への取り組みの少なさは顕著である。昨今さんざん日本人の英語力の低さが指摘されながらもなんら具体的な対策がとれず、いまだにただ「英語の授業数を増やそう」だとか「小学校から英語の授業を行おう」と言っている段階であることもぬるいと言わざるを得ない。日本における教育課程で英語によるディスカッションが日常的に課され、英語で思考し会話することが必要とされる日は果たして来るのだろうか。これらの問題は、おそらく日本人が排他的な単一民族であり日本語のみで快適な生活ができる日本の環境にも原因があるだろう。ケンブリッジでの生活の話を通して置いてプログラム終了後日本に帰ってきたときのことを語ると、最初に感じたことはあらゆる物品・広告における英語表記の少なさと、それに伴うであろう外国人の少なさであった。帰りの成田行きの飛行機の乗客も日本人がほとんどを占めており機内では当たり前のように日本語しか聞こえなかった。日本は軒並みはずれた先進国ではあるが、自国の内のみで快適な生活が約束されているためか世界・諸外国におけるスタンダードへの関心や認識が著しく低く、国際社会からは大きく孤立しているように感じた。今後は海外での実情を知っている人間が国の体制や教育システムを根本的に改革し、日本が国際競争において生き残ることのできる国でいられるよう尽力していく必要があるように思う。

ケンブリッジでの生活

話を戻してケンブリッジ大学での生活について回想してみる。当初ケンブリッジに到着したときはその大学の規模に驚いた。東大と異なり、学園都市を形成しているケンブリッジは街全体がいわば大学の施設で埋め尽くされており、その敷地面積の広さは東大の比ではない。この施設には 1000 年近い歴史を持つ建物も数多くあり、学生はそれら由緒ある荘厳な建築群と近代的な研究施設やショッピングモールといった生活施設に囲まれた広々とした街で不自由なくゆったりと勉強できる環境が整っていた。私は滞在先として **Gonville and Caius College** という伝統あるカレッジの寮に泊まらせていただいたのだが、その雰囲気も非常に良かったように思う。朝ベッドから出る頃には隣接する教会の鐘が鳴り、午後に部屋で勉強していると近くの市場からストリートミュージシャンたちの奏でる軽快な音楽が聴こえてくる。また寮の部屋には **Housekeeper** がついており、シーツの交換や部屋の掃除など勉強の妨げになりうることは彼らがすべてやってくれていた。学生が勉学に集中できるよう十分な配慮がなされ

ていたように感じたし、そのおかげで寮生活においては非常に快適な時間を過ごすことができたと言言できる。これに対して東大の学生寮制度は未熟であると言わざるをえない。東大にも三鷹寮などの寮設備はあるにはあるのだが、その生活状態はケンブリッジのもの比べると劣悪である。私自身は東大の寮で生活したことはないので人から聞いた話ではあるが、三鷹寮などは建物自体の老朽化や管理体制の悪さ、学生の生活実態など到底勉学に集中できるようなものではないようだし、大学との距離も遠い。留学生がそこに居住し生活することを考えると申し訳なさを感じるとともに東大、しいては日本の学習環境についての評価の低下につながることも懸念される。もちろんケンブリッジの寮が完璧であるというわけではなく多少の不便はあり、例えば歴史ある建物だけにエレベータやインターネット環境が整っていないなど近代的な設備が不足しているという問題もあったが、学生の生活・学習環境においては東大よりはるかに優れていると確信をもって言うことができる。また東大のみならず日本の大学では学生がワンルームマンションで一人暮らしをすることが一般的となっているが、海外におけるスタンダードである大学の学生寮での生活は学生にとって大学における学問以上のことを経験し学ぶことのできる大きなメリットがあるように思う。毎日同じ空間で生活を共にすることにより友人との仲間意識や絆が深まり非常に密な関係を築くことができるし、大学内に居住空間があることは講義室や図書館など大学施設への移動時間の短縮にもつながる。実際自分は大学4年間において一人暮らしをし、その間通学に非常に苦労したこともあり、東大でももっと広く学生が寮で快適に生活できる制度を整える必要があると強く感じる。快適な生活環境は学生の勉学を容易にするだけでなく、学習意欲を促進させ、さらには学生に幅広い活動に参加できる時間的・体力的余裕を与え人間性の豊かさを形成することにもつながる。それらの環境をすでに提供できているケンブリッジとできていない東大との間には、卒業した学生の質にも大きな隔りがあるのではないだろうか。

授業やその他の学習について

私たち GSP の学生は他のサマープログラムと共同で開催されている **Plenary lectures** の中から朝 2 つ、夕方 1 つの講義をとることができ、それ以外の学習システムとして週 2 回程度のメンバー全員が参加する全体ディスカッションと、週 1 回の **Supervision** と呼ばれる 3 人程の学生と 1 人の教官からなる小グループディスカッションがあった。この GSP の内容自体は他の大学で行われているサマープログラムと比較して特別優れているものとは感じなかったが、東大の教養課程における教育体制とは雲泥の差があると感じた。

まず、これも日本で一般によく言われながらなんら対策が取られていないことであるが、教育におけるディスカッションの占める割合、重要性である。海外の学生の講義への参加姿勢はすばらしいと思った。通常の講義においても講義中・後を問わず質問が飛び、講師がそれに答えちょっとしたディスカッションが始まる。今回参加した講義の中で学生から質問の出なかったものは一つもなかった。海外の学生は講師との相互のやり取りであるディスカッションに非常に積極的であり、授業にもそういった雰囲気が出てきていると感じた。また英語での授業にはもちろんイギリス人以外の学生でも弊害なく参加でき、そのため受講している学生の多様性にも驚いた。国籍の幅広さもさることながら、本当に老若男女を問わずあらゆる世代・性別の学生が聴講しており、学生がほとんど一元化されている東大との違いに圧倒された。東大では留学生を含め多様な学生が容易に入学でき、学べる環境が圧倒的に不足している。

また東大の教養課程において少人数でディスカッションする機会というのはほとんどないと思う。教養課程の多くの講義は学生が大人数で受講し質問もほとんどせずただ聞き流し、テストで点をとれば単位がもらえ進学できる。このシステムは大学にとっても学生にとっても楽ではあるが、学生が知識や技能を習得するという点においての効果は薄い。実際今自分が思い出そうとしても大学時代の授業内容の記憶はほとんどない。これに比べ少人数で議論し教官に助言をもらいながら学習するというシステムは、学生にとって効率よく能力を伸ばすことができるだけでなく、学習意欲・好奇心を刺激するという点でも非常に有用であると感じた。もちろん通常の学期の全学生に対し教官を割り振って密なディスカッションをすることは少々難しいとは思いますが、せめて講義は東大においても議論をする余裕や体制を作る必要があるように思う。

欧米の学生・現地での交流

海外の学生は非常に要領がいい。もちろん勉強もしっかりするが、遊びもちゃんとする。平日でも夜中まで飲みに行き、週末には映画や演劇、観光、クラブでダンスなど遊びにもとても積極的だと感じた。それでいて課題もしっかりこなし、ディスカッションでは自分の意見をビシバシ主張する。彼らはメリハリの付け方がはっきりしており要領よく何でもこなす人たちが多く、この学生の質の違いには日本と欧米の大学入学システムの差が大きく関わっているように思う。日本の大学とは異なり様々な尺度で入学する学生を審査・選考する欧米の大学は門戸が広く出口が狭い。そういったシステムの方がより幅広い可能性を持った学生を獲得しやすく、学生の多様な人間性・異なった方向性に強く結びついているように感じる。試験の点数のみによって選別する日本の入学

システムにも良い点はあるだろうが、東大の学生の多様性の無さを見るとここでも見直しが必要であると言わざるを得ないだろう。東大には勉強以外のことができない学生が多いし、外国人や女性の割合もケンブリッジに比べると極端に少ない。外国人に関しては英語での授業がほとんどないことも原因だが、根本的に入学のシステムも見直す必要があるのではないだろうか。

ケンブリッジ滞在中朝晩の食事は **Gonville and Cause College** 内のホールで食べていたのだが、このときは各種サマープログラムの参加学生全員が一堂に会するため、いろいろな国籍・バックグラウンドを持つ学生と話す機会が多かった。中でもアジア人とは見た目が似ているため親近感を感じることも多く、また地理・歴史的に共通した知識もあり、より深い話をすることができた。サマープログラムの参加者の中には大学生以外の学生もおり、そこで出会った韓国の高校生とは専攻分野も近く話がはずみとても仲良くなることができた。彼は韓国のサイエンス専門高校の留学プログラムでケンブリッジにきて講義を受けているという。高校生にして大学の講義を英語で聴講していることにはもちろん驚いたが、彼はその年齢ですでに英語も自分よりはるかに堪能だし、専門分野の知識（彼は **Molecular Biology** を専攻したいといていたのだが）もかなりのものを持っていた。自分は日本では名のある高校を出ているけれども高校生当時そんな英語力や知識は全く所持していなかったし、高校生でも学校の費用でケンブリッジに留学させる韓国の教育姿勢はすばらしいと思った。

また大学生より年上の参加者も多数おり、その中では中国から来ている女性の大学講師の方と話すことができた。彼女と会話をし始めた当初、他の人と話しているときには感じない違和感があり少し相手から煙たがられているような感覚があった。その理由は会話をしていくうちに判明し、中国における反日報道が影響していたようである。日中関係の教育・政治問題について中国では偏った報道が現実になされているようで、歴史教科書や靖国神社参拝などにおける日本の教育・姿勢に対して実際の現状とは異なった認識があったようだ。しかし実際に話してみるとそれらの誤解は解くことができ、また日本の良さについても知ってもらえることができた。東アジア諸国とは歴史問題による軋轢がまだまだ存在しており、ここにおいては国際社会における関係の良好さを保つためにもお互いの理解が非常に重要であることが理解された。この相互の理解のためにも世界の標準言語である英語の必要性・重要性を再認識することができたと思う。

東大の長所

このようにケンブリッジでの生活を描写してみると、ケンブリッジに比べて東大の欠点ばかりが目立ってしまっているように感じるが、実際には今回の経験を通じて東大や日本の良いところも同時に認識された。たとえば細かい生活設備における利便性では断然日本のほうが優れており、トイレ・風呂などの設備、コンピュータやインターネット環境などの電子機器系統はケンブリッジにおいては少々不便にさえ感じた。また本プログラム中にケンブリッジの研究施設をいくつか見学させていただく機会があり、これには自分は大学院生として非常に興味があったのだが、研究機関の設備としては特に目新しいものはなく、むしろ機材の充実具合においては東大のほうが優れているようにすら感じる部分もあった（もちろん自分が見ていないだけなのかもしれないし、目に見えない部分、例えば研究結果の論文への出しやすさ、ラボ同士での協力のしやすさといった点ではケンブリッジの方が優れている可能性もある）。これらを吟味すると、大学での教養課程を考えるとケンブリッジの方が圧倒的に優秀だが、大学院などの研究機関としては東大もひけをとらないように思う。我々日本人は日本語ができるという特権を生かせば東大や日本国内で研究をすることにも十分価値があると言えるだろう。

今後の進路

今後の自分の進路については定かではないが、留学の可能性も含め近い将来必ず海外に出ようと思う。今回のサマープログラムの参加目的の一つは海外での学生生活を体験し将来の留学の参考にしようという意図であったし、実際にそれを体験した今その想いは実像を帯びてより一層強くなったと確信している。もちろん海外で勉強することがなんら生易しいことではないことも確認されたが、同時にその意義や価値、素晴らしさは身をもって体験することができた。また日本が先進国でありながらいかに閉鎖された国であるか、海外におけるスタンダードからはずれているかということについても改めて認識することができた。今後日本は国同士の距離がますます近くなりつつある国際社会との距離を縮める努力が必要であると思う。そのためにはまず我々学生が少しでも海外への関心を高め、各国の学生と共に競い合って学業を深めていくことが何より大切であると身に染みて感じる。そして誰もが言うことであろうが、今回のサマープログラムにおいて何より一番の経験は、海外のすばらしい学生たちとの交流で、今回できた人と人とのつながりはこれからも途絶えることはないだろう。最後に今回のプログラム参加にあたって、大学との連絡や奨学金、その他多くの面において支えていただいた関係者の皆様に心より御礼申し上げる。

IARU Global Summer Program 2011 参加報告書

私は今夏 Global Summer Program に参加し、イギリスのケンブリッジ大学で4週間を過ごした。今回のプログラムに参加する際のもっとも重要な目的として、世界各国の学生との国際交流を掲げていた。昨年度アメリカの大学のサマースクールに私費参加した経験もあって、他国の学生と共に授業を受け、彼らの考えに触れることに強い関心を持っていたからである。昨年度アメリカでは、授業やそれ以外の時間に他学生と交わることで多くのこと得、さまざまな刺激を受けたので、今回の GSP でも日頃大学の中で勉強しているだけでは得ることのできない色々な体験をし、自分の立場を相対化するきっかけとなると考えていた。私の専攻は社会学で、参加コース名が”Shaping the World: Understanding the Past, Predicting the Future”だったこともあり、さまざまなバックグラウンドをもつ学生たちと「社会」の捉え方について意見交換をし、自分の視野を広げたいとも考えていた。さらに、そうした環境に「東京大学の学生」として参加することにも大いに意義があると考えていた。というのも、昨年度アメリカで出会った人に「東京大学の学生です」と自己紹介すると、どの人も非常に興味を持ってくれたからだ。さらに「東京大学は世界でも屈指の優秀な大学だ」「教育レベルの高い大学だ」と口をそろえて評価してくれた。私はそれまで自分自身を「日本の中の東大生」としてしか意識しておらず、「東大生」が世界的にどのように見られているのかということには全く無関心だったのだが、それがあってから大学の代表として海外に渡ってみたいと強く思うようになった。このように考えていた私にとって、GSP は非常に魅力的なものであり、期待に胸をふくらませながらの参加であった。

私の参加したケンブリッジ大学のプログラムは、おもに講義・ディスカッション・Supervision によって構成されていた。午前中は、Literature, Science, Art History, History, ISS(International Summer School)の5つのコースで開講されている講義の中から関心のあるものを自由に選択でき、午後は講義内容に関連したトピックに関するディスカッションの授業を受けるなどした。さらに、毎週 1,500~2,000 語のエッセイ課題が出され、週に一度、Supervision というクラスで添削指導を受けた。プログラムの講義はオムにパス形式で、各コースが設けられたテーマに沿ってさまざまな研究分野の教授によるさまざまな講義が開講されていた。たとえば、Art History コースでは「光と空間」が統一テーマであり、複数の教授が「光と空間」を切り口に、中世・近代絵画、建築、写真など様々な領域に渡る講義を行っていた。4週間で計40講義以上受講したが、講義内容は専門外の学生が受けても関心を持てるような導入的なものが多く、高度な内容の場合でも丁寧に解説されていた。また、ほとんどの授業でパワーポイントが用いられ、どの教官もユーモアを交えた「退屈させない」授業を展開しているのが印象的であった。GSP の学生は基本的に、午前中の講義と夕食後に行われるイブニングレクチャーに出席できた。ディスカッションは、GSP の学生向けに特別に組まれた授業で、午前中の講義やイブニングレクチャーで講義された

内容に関連したトピックで、教授を囲んで参加学生が自由に質問したり意見を述べたりした。どの学生も自国や世界の政治・経済・文化についてよく勉強しており、さらに自分自身の意見をもっていることに驚かされた。と同時に、議論の最中に「日本ではどうなのか」と問われたときに上手く答えられない自分に苛立つこともあった。また、カリキュラムにディスカッションのクラスが組み込まれていることに関して、講義を聞くだけではなく頭を使って積極的に参加する授業があるのは、とても有意義であると思った。Supervisionというのはケンブリッジ大学伝統の少数指導教育プログラムで、学生対指導教官(Supervisor)が2~3対1で行われる。私のSupervisionクラスは、芸術をテーマとしたグループで、ヴィジュアル・イメージが専門のSupervisorの意向もあり、おもにシュルレアリスムを取り扱った内容となった。エッセイ課題のテーマは、グループ内の学生の意向も汲みつつ毎週木曜日の授業の度にSupervisorが決定し、それを水曜日の締切日までに1週間で書き上げる、というサイクルであった。Supervisionでは毎回、提出したエッセイへのコメントの他、そこで各々が取り上げたトピックに関して議論を行った。Supervisorがトピックに関して学生に問を投げかけるのだが、そこには一つの決まった正解があるのではなく、その場で考えたこと、感じたことを素直に述べるのが求められた。毎週エッセイを書くというのは、アサインメントとして厳しいと感じることもあったが、毎回Supervisorがしっかりとエッセイを読み込んでコメントをつけてくれる点や、疑問に思ったことを何でも質問できる点、また時間をかけて議論できる点は少人数指導ならではの利点だと強く思うとともに、この指導プログラムを受けていれば必ずライティングやクリティカル・シンキングの能力が伸びると感じた。ディスカッションとSupervisionはGlobal Summer Programのために編成されたコース内容であったが、ケンブリッジ大学では広く一般に向けてサマースクールを開講しており、Literature, Science, Art History, History, ISSの各コースに世界各国から参加している学生も多くおり、そうした学生と講義室やカレッジで交流を持つこともできた。

ところで、このプログラムの授業以外に特徴的だった点は、カレッジでの生活である。ケンブリッジ大学サマースクールは学生の宿泊施設としてカレッジを開放しており、GSPを含む全参加学生は大学の30以上あるカレッジのいずれかに滞在し、そこで生活していた。ケンブリッジ大学のカレッジとは、学生生活の授業以外の全てが行われる生活の場であり、他の大学で言えば学生寮のような役割を果たしている。今回のプログラムでは、毎週提出するエッセイ課題や、早口のネイティブ・イングリッシュで展開される講義、ハイレベルなディスカッション・クラスなど、コース内容を消化することももちろん大変だったのだが、それよりも授業の外での他学生とのコミュニケーションについてもっとも苦勞し、もっとも考えさせられた。カレッジではアコモデーションの一環として、毎晩参加者全員が一同に介して夕食を取るという決まりがあった。もちろん、体調が悪いときや気分が乗らないときは自由にスキップしても構わないのだが、代わりの食事が出るわけではないし、滞在費に夕食代が組み込まれているということもあってか、ほとんど全ての学生が毎晩ダ

イニングホールで夕食をとっていた。正直なところ、同じカレッジに滞在する全学生が毎日毎日決められた時間に一斉に夕食を取る、というのは想像以上にストレスフルに感じる瞬間もあった。気楽に一人か少人数で軽い夕食をとったあと、さっさと部屋に帰ってプライベートな時間を過ごしたいと思うときもあった。ところが、他の学生を見てみると、顔見知りでない学生同士でもテーブルで隣り合わせになれば、自然と世間話が始まり自己紹介をし、コミュニケーションがスタートするのである。さらに夕食の時間に限らず、どこか外出したり何かする際には知り合いかそうでないかにかかわらず、同じ場に居合わせた人全員を誘うのである。そして、見ず知らずの学生が加わっても自然と歓迎する雰囲気がある。ここにあった。こうしたことに共通するのは、全く排他的でないという点である。私ははじめ、あらゆることに対してオープンな、これが俗にいう「欧米文化」なのだろうか、とただただ感心していたのだが、ある日誰かどこかで“Be Social”と言うのを耳にした。文脈としては、せつかく世界各国から集まった多くの学生と知り合える機会なのだから、積極的におしゃべりをして交流しよう、という話だった。私はそれを聞いて、みんながみんな夕食の時間やその他の活動を楽しむために主体的に交流をもとうとしている“Be Social”精神に気づかされ、はっとした。今まで無意識のうちに「文化の違い」と片付けようとしていたことが、単なる自分の消極性と怠慢であると指摘されたような気がしたのだ。おそらく発言した学生にとっては何気ない一言だったのだろうが、私にとってはまさに目から鱗が落ちるような言葉だった。よく考えれば当たり前だが、どの学生も、多少の文化の違いはあれど、努めて意識的に社会的であろうとしているのだ。さらに思ったことは、多くの学生が日本のマンガ・アニメ・映画や食文化についての知識が豊富で、そうした話題について会話を引き出そうとしてくれたことだ。おそらく彼らは日本文化のみに精通しているわけではなくて、他の国に関しても豊富な会話の「引き出し」をもっているのだと思う。当たり前のことだが、映画や小説、好きな食べ物など共通の話題が見つければ会話は自然と弾む。さらにそれが会話の相手の国に関するものであれば、相手は嬉しい。また、自国の文化について聞かれたときに、相手にわかりやすく説明できることも必要である。重要なのは、日頃から国際式豊かで世界の文化に対して好奇心をもつこと、それと同時に自国の文化についてよく学んでいることだと強く感じた。

「コスモポリタン」という概念がある。辞書によれば、形容詞であれば「<場所・社会・雰囲気などが>国際的な。全世界的な、多文化[民族]的な」、名詞であれば、「(海外体験が豊富で国家的偏見のない)国際人、世界人」という意味である。「コスモポリタン」とは、国際色豊かで、他国の文化に関心を持つ人のことを指す。しかしそれだけではなく、国際的か否かを超えた、あらゆる偏見や排他性のないすべてのコミュニケーションに通じると感じた。GSP で出会った学生は、まさに「コスモポリタン」だったのである。この体験によって、国際交流についての考えも変化した。国際交流は異なる文化的背景をもつ者どうしの国際的な交流であると同時に、生身の人と人とのコミュニケーションである。相手を理解したいという気持ちと自分を理解してもらいたいという気持ち、そのための努力が重要

であると心から感じた。今回 GSP 参加して、1 ヶ月間海外の大学で学び、世界中の学生と交わるという素晴らしい機会を与えられた。今回の経験は、「海外留学」と言うには短い期間であったかもしれないが、その中でも大学の授業の内外で多くのことを吸収できたと自負している。今現在の学びの環境を客観的に俯瞰し、自分自身のもっと勉強すべき点が明らかになった上、授業の外、日々の生活の中で他学生から学ぶことも多く、毎日、一分一秒が貴重な経験であった。今後も、今回のプログラムのように海外で学ぶ機会があれば、ぜひとも積極的に参加したい。

IARU GSP (University of Cambridge) 参加報告書

7月10日から4週間、ケンブリッジ大学でさまざまな講義を聴講し、他大学から参加している学生とのディスカッション、さらにケンブリッジ大学の **supervision** を体験させていただきました。参加学生は合計14人で、専攻も文学、政治、経済、数学、建築、生物などと本当にさまざまでした。学年も3年生から修士1年生と幅広かったです。

【Lectures】

GSP 以外にもこの期間はケンブリッジ大学のサマースクールが開講されており、それに混ざる形で午前中は講義を受けました。科目は **Science, Literature, Art History**(前半2週間のみ、今年度で終了)、**History**(後半2週間のみ)、また **International Summer School** と呼ばれる科目を特定しないものもありました。一日に1つか2つ自分で好きなものを選択して参加する形でした。わたしにとっては特に **Science** と **Art History** が興味深く、**Science** では最新の研究技術や成果を学ぶことができ、**Art History** もスライド資料などがとてもわかりやすく、これまでまったく知らなかった世界を見せていただいたように思います。基本的にこれらは聴講するだけで、これらに関する予習や課題はありませんでした。ただ、このうちいくつかは GSP の **Discussion** に関するテーマをカバーしていたので (**Lecturer** も **Discussion** 担当の教官と同じ)、それらへの参加は必須と指定されました。夜にも同じように1コマ講義があり、それも受けることができました。

【Discussion】

Discussion は GSP 学生14人と1人の教官とで行うもので、あるテーマについてみんなで話し合ったり、事前に行われる **Lecture** をもとに学生からの質問に教官が答えたり、というようなものでした。英語が母語ではない学生にとっては少しハードかもしれませんが、午前中の講義は規模が大きいので、**Discussion** の方が発言・質問がしやすく、「参加している」という感じが持ててよかったです。トピックは政治・社会・歴史をカバーするものが多かったのですが、それらについて事前に勉強しておけばよかったですと思っています。海外の学生は自国に関する知識が多く、日本についていかに何も知らないかを痛感したわたしは少し情けなかったです。また倫理的な問題など、答えるのが難しく何を言えばいいのか戸惑うような問題を扱うこともあったのですが、どんなことにもはきはきと自分の考えを述べる他国学生の姿から学ぶことは多かったです。

【Supervision】

これは東大でのゼミをさらに少人数で行うようなイメージのもので、2~3人の学生のグル

ープにひとり担当教官が付き、毎週提出するエッセイをベースにディスカッションをしたり教官からアドバイスや説明を受けたりしました。事前に扱いたいトピックの希望を出し、それをもとに大学側が調整してくれたのですが、必ずしも希望通りのトピックが学べるわけではなかったようです。でもわたしの担当教官はわたしたちの専攻や希望を聞いて、かなりフレキシブルに対応してくださいました。

わたしたちの担当教官は 20 世紀文学を専門とする先生で、先生と一緒に 20 世紀のイギリス文学・アメリカ文学をテキストベースで分析し、言葉の使い方から筆者の意図を探る読み方を学びました。所属した学生 3 人のうち、ひとは文学をマイナーで学んでいました（メジャーはジャーナリズム）が、もうひとは数学専攻で文学は全く初めてだったようです。わたしも心理学専攻で文学を学んだ経験はほぼゼロだったのですが、エッセイにはいつも丁寧に先生がコメントを下さり、**supervision** 中のディスカッションで得るものがすごく多く、何をやったらいいのかわからないというようなことはなくともおもしろかったです。数学専攻の学生もすごく楽しいと言っていましたし、すごく遠いように見える数学と文学で共通する部分を発見しおもしろいと話してくれました。ただ、毎週本を一冊読むように指示され、しかもエッセイを書くときには参考文献を使うよう言われていたので、ほかの **supervision** グループと比べても決して楽なグループ・課題ではありませんでした。それでも、同じグループの学生と「大変だね」と言いながら一緒に頑張った経験は私にとってかけがえのないものです。

【Extra Curricular Activity】

GSP を担当してくださった Rob Wallach 先生はとても親切で、毎週金曜に先生とのミーティングがあったのですが、授業やプログラムに関する相談だけでなく、週末の過ごし方やケンブリッジの案内など、本当に力になってくださいました。それ以外にも自分たちで近隣の町やロンドンなどへの日帰り旅行を計画し、週末もとても充実した時間を過ごすことができました。参加学生 14 人のうち 11 人は同じ建物（ブロック）に滞在していたので、誰かの部屋に集まっておしゃべりをするのもよくありました。

【参加前・参加後の変化】

昨年の夏期休暇を利用し語学留学をしたわたしは、もう語学学校や語学コースではなく、実際に英語を使うことで英語を学びたいと考えていました。東京大学での授業は日本語で行われるものがほぼすべてで、日本での生活においては、普段の生活ではもちろんアカデミックな場面でも英語を使う機会がほとんどありません。場面に関わらず英語が思う通りに使えるようになりたい、もっと英語を使って学びたい、でも休学して留学しようという決心はなかなかつかない、そんなわたしには、1 ヶ月間海外大学で勉強できる GSP はとても魅力的なプログラムでした。幸運にもケンブリッジ大学で学べることになり渡英したのですが、最初は本当に大変な毎日でした。すでに書いたように、授業で使われる英語で理

解できるのは 70 パーセントくらい、課題はとても多く、2000 語のエッセイは想像以上に長く時間のかかるものでした。参加学生のほとんどは英語ネイティブか大学での共通語が英語で、GSP 参加学生内で行われるディスカッションでは、意見をすどころか議論についていくだけでも精一杯で、海外大学で学ぶということのハードルと自分のレベルとのギャップに愕然としました。しかし、一緒に学んでいる学生に相談をすれば本当に親身に話を聞いてくれ、授業でわからないことがあっても彼らが説明してくれることも多く、友人に励まされ助けられながら過ごした毎日だったといま思い返しています。

英語以外の面でも彼らに刺激を受けることは多く、いちばんの印象は「視野が広い」ということでした。食事中の会話の話題ひとつをとっても、もちろん今日見たこと、聞いたことなどささいなことも話しますし、死刑制度の是非や政府・政治のことなども話しました。彼らは「わからないから何も言えない」と言うことがとても少ないと感じました。日本ではたとえ授業の直後でもその授業の話題について話すことは少なく、授業の話題について話したとしても「まあよくわからないけど」「わたしの意見だけど」などとぼかしてしまうことも多いと思いますが、こちらではそういう場面は一度もありませんでした。面白かった授業の直後はそれについていつも帰り道でディスカッションが起り、みんながそれぞれ意見を持っていました。これはきっと、個人の感想に正誤はないという意識が彼らに共通してあったからではないかと思います。日本の学生は正誤を気にすることが本当に多く、そのために起こらないディスカッション、話し合いが多いというのはとてももったいないと今回痛感しました。こういった意見の交換に学ぶことは本当に多いと思いますし、これによって授業の理解が深まることも多くありました。日本の大学に戻ったあと、わたしもしっかり自分の意見を発信していけるようになりたいと思いますし、大切なのはわたしたちの意見であり、その「正誤」は問題ではないというアイデア自体を体現していければと考えています。

留学したいという漠然とした思いはあったもののなかなか決心がつかないというのが GSP 参加前の気持ちでしたが、GSP を終えた今、絶対に一度は留学したいと考えています。「学ぶ場所への視野」という面でも GSP で出会った学生たちは視野が広く、多くの学生が近い将来の海外留学を考えていました。コペンハーゲン大学ではほぼすべての授業が英語で行われており、また授業で使われるテキストも英語であるという話を聞きましたが、その理由をコペンハーゲンの学生に聞いたときに、学生の半分かそれ以上が留学生であることに加え「コペンハーゲンが世界に発信・輸出できるものは知識しかないから」と答えてくれたことが印象に残っています。前者の理由は日本には当てはまりませんが、後者の理由は日本にも言えることではないかと考えています。大学での Science の授業を受けているとき、日本での研究知見が引用されることは決して少なくなく、日本が発信している研究内容のレベルと評価の高さを知りました。やはりわたしたちももっと国際的に発信していかなければいけない、そのためには学生のうちから英語で自分のやっていることを語れなければいけないと思います。わたし自身、こちらの授業中でわたしの専攻である心理学

について意見を求められることもたびたびあったのですが、どれだけ一生懸命勉強していることでも日本語の単語しか知らなければこちらから発信することもできないし、最新の知見を知らされても辞書で調べながらでないと理解できず、議論にも参加できず、もどかしい思いをしました。日本は国際的に学問をリードしていく立場にあると思います。そこで学ぶ学生もその意識を持ち、共通語としての英語に流暢でなければ置いていかれてしまうということを認識する必要があると思いました。

プログラム終了後にプログラムで知り合った友人と「いちばんの思い出は何か」という話をしたのですが、ある子は「みんなで植物園に行って日向ぼっこをしたこと」、ある子は「大学のガーデンで本を読んでいた時間」などと答えていました。わたしにとっていちばんの思い出はやはり **Supervision** で、本当に多くのことを学びましたし、同じグループにいたふたりとは特に仲良くなれた気もしています。このプログラムに参加して得られたことは書きならべられないほど多いと思うのですが、わたしが友人と話した会話のように、ひととの出会い、ケンブリッジというすばらしい環境、そこで学んだ内容、どれをとっても来てよかったと思えることばかりです。日本にとどまっていたでは得られない刺激を受けました。このような経験を可能にしてくださった東京大学、ケンブリッジ大学の先生・スタッフの方々、両親、友人、ほかすべての皆さまに、心から感謝しています。